京都新聞 2017.10.11 第3種郵便物認可

文化

古都の深層

秘められた場の歴史

高木 博志

1 東寺

美術価値見いだされ文化財化

このさし絵は、明暦4（1658）年の観光ガイド『京童』の東寺である。

描かれているのは現在の東寺境内の西側にある大師堂。弘法大師（空海）の御影が安置されている。西寺を創建した守敏が、東寺の弘法大師に祈りの争いに負けた一場面である。弘法大師が策を弄して、魚の「このしろ」を焼き、死者を焼いた臭いと、まどった守敏に、弘法が法力をつのらせ、守敏はあとかたもなくなる、との縁起である。

『京童』であきらかなように、室町時代から始まる弘法大師信仰の庶民への広がりの中で、江戸時代には大師堂が観光の花形となった。

ところが20世紀になると、東寺の観光スポットは変化する。岡倉天心の「日本美術史」で、古代から近世にいたる歴史叙述が成立し、東寺の仏像は、平安前期の密教美術の模範となる。仏像は信仰の対象から、ギリシャ・ローマに比せられる「彫刻」の芸術へと読み替えられた。象に乗る美形の帝釈天像に象徴される、講堂の21体の立体曼荼羅が、平安京最古級の芸術作品となってゆく。帝釈天は、もはやミロのヴィーナスと同じカテゴリーである。観光の中心は、東寺西側の大師堂から、東側の講堂の平安前期の密教美術や、金堂の桃山時代の優美な薬師三尊像、そして京都駅から見える東寺の五重塔になる。観光キャンペーン「そうだ京都、行こう。」の世界だ。

江戸時代初期の名所図会「京童」の東寺の場面で描かれている大師堂（御影堂）。東寺のシンボルは講堂の立体曼荼羅ではなかった

東寺講堂の立体曼荼羅（京都市南区）＝撮影・中尾悠希

20世紀に、帝釈天像はいわば信仰の対象から文化財化するが、同時に東寺そのものが、講堂・宝物館などの美術品をみせ拝観料を取るように文化財へと変化する。同様に、江戸時代の旅人は『平家物語』で源頼政が自刃した平等院の扇の芝に足を運ぶが、20世紀には鳳凰堂が平安後期の貴族の国風文化を代表し、国宝としての美術的価値で観光の中心となった。

しかしながら弘法大師への庶民信仰の場としての東寺の役割も、消えたわけではなく、今日でも毎月21日の弘法市のにぎわいにあらわれる。

そして江戸時代には由緒や信仰に満ちていた京都・奈良という都市そのものが、1990年代に古都として世界遺産に指定され文化財化するのである。

（京都大人文科学研究所所長）

◇

優雅な宮廷文化や伝統ある社寺など観光都市に合致するイメージが彩る京都だが、深層には聖と俗が複雑に絡む歴史が眠る。つくられた「古都」像と埋もれてしまいがちな真の姿を「京都の歴史を歩く」を著した歴史学者3人が紹介します。

＝第1～第3水曜に掲載します

たかぎ・ひろし　1959年大阪府生まれ。立命館大大学院修了。北海道大助教授を経て、現在、京大人文研教授。専門は日本近代史。著書に「京都の歴史を歩く」（共著）「近代天皇制の文化史的研究」「近代天皇制と古都」など。